哲學研究　第九十一號

歷史的と藝術的

西晋一郎

一

歷史的と藝術的とを辨別することが倫理の性質を知るに便なる點がある。美は元來絕對的立場と謂ふべき立場に於て見られるものであるから、此立場から見ればすべて皆美ならざるものはないと謂ふことが出來る。因果關係目的手段關係は勿論、義務といふ如き人格關係すらも之を脫して只其自身で完いものとして之に居れば、如何なる存在も獨立自全であり、利不利は勿論、實非實善不善の別にすら居らぬ所謂遊ぶといふ境涯を呈する。義務に遊べば道德が卽ち美であり、學術に遊べば學術が卽ち美である。只利に遊ぶといふは自己矛盾であつて不可能であるから利を求めるは美であり得ないが、一種の情の發露として之を靜觀する第三者には又美であり得る。遊ぶとは居つて居らぬのである、否定の上に行はれる肯定である。後者は

又愛に居らぬ愛卽ち慈愛であるから慈愛を以て物を觀れば物は皆美である。靜觀とは何等自己の立場に立たず己を虛くして物を觀ることで、かく觀れば物は皆生きて見える。物を美と觀ると物を生意ありと觀るとは同じい。物を情ありと見るは美と見るのである。物を關係的に見るはそれだけ物を機械的に見るので美と相容れぬ。眞の生とは生に居らぬ生である、後者は卽ち自由である、而してすべて自由なる所に美がある、ゲスリンがギリシヤ人には美と自由とは實に一であつたと言へるは如何にもそうである。遊ふとは居つて居らぬことで是れ至上の境である、故に絕對的自由の形式を最もよく呈するものは美である。美とは卽ち全體のことである。全體でないものは生きたものでない、全體としての天地は大生命であり、大美である、天地全體は全體としては善と謂ふよりも美といふが當つて居る。一木一石の末も全體として見れば生きたものであり美である、一念一情の微も全體としては悉く美である。存するほどのものは存するといふと自身が全體といふことを意味するから、すべて存するものは美である。美醜の別が物自身にあるのではなく物に居る態度如何によつて元來皆美であるものが美ならぬものと見られる。美は物にあらずして物を觀る主觀の態度にある、蓋し又此主觀を離れて獨立に物があるのではない。

すべて内容は客觀的である、客觀的内容を統一して全からしめるものは主觀である、内容に透徹して餘すなく足らさるなきは内容に純はらなるので、卽ち統一の純である、主觀の純である。此主觀の純に全がある卽ち美がある。すべて純主觀は美である。通例完不完或は全體部分といふは何等かの統一的原理を抱いて物に臨むからのことである。かかる統一的原理卽ち立場を悉く否定して何等の立場なき立場で物に對するのが慈意を以て物に對するので、このとき物は皆生きる、卽ち物を生かす、物を全くする。慈意を以て物に對するのは靜觀である若し靜觀でなければ慈意を以てでなく愛着激情を以て物に對するのである。夫の藝術上の古典主義（クラシシズム）と浪曼主義（ロマンチシズム）とは一致すべきである、さなくば兩者共に眞の藝術に遠かる。慈意は既に在るものを愛するのでなく愛するが卽ち在らしめるの愛である、卽ち創造的である。靜觀には完全なる形相が展開せられる、これ卽ち美である。故に强いて分かてば慈意は創造的主觀を靜觀は美なる内容を呈する。慈意と靜觀の眼には物は皆完である卽ち美であるといふは故に與へられた物が自ら完美であるのではなく夫の二者が物を完美にするのである、或は二者によつて物の魂に這入る卽ち物の魂と一となるのである。すべて魂が美なるのである、卽ち又生きたものである。山河情あるものと

して見たときのみ山河が美である。自然を美と見るは自然の精神に入ること或は自然を精神の象徴と見ることであつて、畢竟精神自身が美なるのである。一切の立場を否定して己を全く虚しくし、かくて絶對的自由の形式に居るものに美が表はれる。美は絶對的精神の現れである。

自らにして全いものは遊ぶものである、シルレルの謂ふ遊戯である。此所は連續或は關係或は相對を超絶した所である、前後を截斷して卽今一乾坤である。故に連續關係の上から言ふ所の現實非現實の別は此所には無い。美は假現界であるとは必ずしも非現實を意味するのではなく現實非現實の別に居らぬ意味である。生きた美人は美でないといふのではなく審美的の眼には生きた美人と畫かれた美人とは何等差があつてはならぬといふのである。平生の境涯であつても夢裡の境涯であつても美たるに於て何等の差なく、醒めたときに於ける趣も醉中の趣も美なるは等しく美なるのである。遊ぶとは現實非現實の境に居らぬことである。美は善惡正邪を超越するとは善惡正邪の別を無視して美と善と衝突するといふのではない、善惡正邪は現實界に於ける差別なるに美は現實界に居らぬことを指すのである。故に善と美と衝突する如きはあり得べからざることで、若し衝突すと言はば美が現

實界に入り込むこと卽ち美たるを失ふことを意味する、最早や遊ぶものではなく營むものであるを意味する。一面から見れば在るほどのものは皆現實ならざるはない。美を現實の外といふは其自身完結して他に竢つなき相に於て見られることである、故に斯く見れば最も現實的である道德も又美であり一切現實の根たる宇宙も美である、從て現實の外にある。現實の外にあるとは現實非現實の問題に亙らぬことである。斯く見るとき宇宙の運行自身、世界史の進行自身が遊戯である、而して遊ぶのが物の至上の境である。實に宇宙（コスモス）は神の大藝術であると見ることが出來る。故に藝術家として人は神の肖像であり第二の造物主である意に最も適ふのである。すべて一箇完結した境を「コスモス」と稱せば、すべて「コスモス」は皆美である、人間の藝術は此大宇宙の中にありながら之を餘所にして一箇の小宇宙を現んずる、卽ち藝術家として人間はかかる宇宙の創作者である。天才（ゼニウス）といふ言葉は藝術家として見られるときにのみに眞に人間に適合する言葉である。物を創造する獨立の原理を慈愛と稱せば美は慈愛の產であり最も生意を宿ごすものである、最も實在的である。藝術は所謂自然よりも一層實在的である、最も生きたものである。現實非現實の別に居らぬものが最も實在的である、遊ぶことが最も實在的である、吾人が最も現實性（ウイルクリヒカイト）

を覺える眞摯なる努力は實在的（レアリテート）とならんとする努力であつて卽ち尙ほ實在性を缺く所あるを示すもの、遊ぶの境にまで到らんと努力するものである。有限なるものは努力するを免れぬ、此所が現實性の由て出る所である、只遊ぶとき有限者は暫く絕對的自由に居る卽ち絕對的自由の形式を得る。大自然の道具となつて物を生ずるは本能によつて自然愛によつて生產するので眞の意味に於ける創造ではない、其所產は、只の物に過ぎぬ。慈愛から出る所作は自ら主たるもの一箇獨立の造化であるものの生產であつて卽ち眞の創造である。認識の對象としては與へられたものであつても慈愛を以て之を見れば之を新に創造するのである、卽ち之を美と見る。種々の情も欲も斯く見られるとき皆美である、其人にあつては其情や欲は醜惡である場合にも慈意を以て之に眺め入るものはすべての情や欲の眞の創造的原理の立場から之を新たに淸らかなるものに造り出すのである。一切を否定した立場からの統一は卽ち種々の相對的立場からの統一（種々の抽象的統一）を否定した立場からの統一であつて、卽ち最も直接的なる統一である、此統一が卽ち實在性である、卽ち又美である。此直接的統一に居れば情も欲も所謂情欲又は欲望ではなく自全の境であつて何等の邪も不善も挿まる餘地がない。最直接的統一が眞の創造的原理からの

創造である、卽ちすべての自然愛の否定の上に新に起る慈愛の創造である。愛に居らぬ愛卽ち慈愛は心の淸なるものの愛であつて、此愛は物を靜觀する、而して靜觀すれば物皆美である。すべての情は愛の種々の樣態であるとせば、自然愛の否定はすべての情を其純なる本に還へらすことである、此純なる情の發露が藝術である。

二

神の立場からは宇宙は神の藝術であり、歷史も全體として神の藝術であり、從て此所では歷史卽藝術であるとするのは、形式上に於てのみならず內容上に於ても絕對的自由であるを神の立場とするからである。只形式上に於てのみ絕對的自由たり得る有限的理性には歷史的と藝術的の別が起る。吾人が自然と藝術とを區別するとき後者は人間の作なるを意味する。藝術固有の意義に於ては藝術は只形式に於てのみ絕對的自由であるものの創造であるとせば藝術は完全に具體的であると謂へない。藝術の美は天地大美の美の謂はば肖像であること恰も藝術家としての人間が藝術家としての神の肖像であるが如くである。藝術は人間の作る小宇宙であるといふ意味に於て人間は正さに第二の造物主である、第二の造物主の作は第一の

造物主の作ほどの具體性を有たぬ。自然よりも藝術の方を一層具體的であるとするときの自然は自然的立場から見られた自然であつて、自然を其直接的創造者の立場から見れば最も具體的なるもの、卽ち眞の精神である。自然美といふは自然的認識に於て與へられたものとしての自然を純主觀の立場から立て直ほしたもの、純主觀の象徵として自然を觀たものである、自然を情あるもの或は情の表現として觀たものである、卽ち又自然の魂に這入つたものと謂ふことも出來る。宇宙を美と見るのも實は有限的理性の純主觀の象徵として宇宙を觀るのである、卽ち又宇宙の精神に與かるのである。內容形式共に絕對的自由なる立場からは宇宙は美であると共に善である、美ではあるが善ではないといふ如きことは考へられない、斯る美は最具體的の實在である。藝術は純主觀性を表し道德は主客合一であるのは正さに有限的理性の有限的たる所である。絕對的理性にあつては純主觀性卽純客觀性であると見ねばならぬ。故に美は直に善善は直に美でなければならぬ。有限的理性は絕對的創造は爲し能はぬもので、學術に於ても道德に於ても其作爲の素材を必要とする、無から有を生じ能はぬ、何等かの意味に於て所與性を必要とする。吾人は主觀としては直に無限性に與かることが出來ても客觀としては或る本原的限定を有つとせねば

ならぬ、是れ吾人の被創造性である。學術は此客觀的內容の必然的性質を知らんとするもの、道德は主觀の無限的統一力によつて所與的客觀を自己限定に轉して主客合一を致すものである。此所で自己限定は絕對者の絕對的自己限定ではなく後者に主觀の無限性の力によつて與かるのである、自然的認識に於ては自然として與へられたものが自由なる主觀には當に實現せらるべき意義として現はれる其意義を實現することである。吾人の道德的自我は純粹意識界への復歸とも謂ふべく、道德的實現は絕對的實現ではなくグリーンの言へる如く再現である。只時を超越すると考ふべき純粹意識界にはかかる再現が何等の增減をなさぬのである。吾人は道德に於て宇宙的內容の自主者たることを得るが、それは主觀としては絕對的自由に形式上一致するを得るからである、內容に於ては一物の末も一念の微も之を生ずるを得ず之を殺すを得ず、只與へられたとして之に對するか之れが主となつて自己內容に轉ずるかに自然的生活と道德との相違あるのみである、而して後者の方が卽ち主客合一である。善とは此意味に於ける主客合一の內容である、否此內容が宿ごす意義である。善の實現には諸種の智識を必要とするのも所與的客觀を自由主觀によつて統一する上に此客觀の諸の性質を知るを要するからである、而して此客觀の終

極の性質の認知が卽ち道德そのものである。此終極の性質は終極的なるが故に一切の客觀界との終極的關係の上にのみ存する、卽ち物の終極的性質は一切のものを一貫する意義の上に存する。故に道德は客觀界を貫く意義の實現のことであつて、是れ其歷史的なる所である。此所に有限的理性に歷史的と藝術的との異同が起る。

有限的理性は被創造者として其客觀が或る本原的限定を有たねばならぬといふは絕對者の絕對的自己限定のことである。故に又此客觀界は一面普遍的世界、一面各自に特殊の世界である、共通の世界であつて同時に各自の世界である、二つの世界が別々にあるのでない。此世界は認識對象界としては超個人的純粹悟性の對象であり道德界としては超個人的純粹意志の對象であつても、此超個人的主觀は個人的意識の主觀として現實に作用らく具體的普遍と謂ふべきである、卽ち具體的に作用らくときは普遍相を具したままで個々特殊相を實現してゆくものである。故に道德のみならず認識も皆特殊的ならざるはない、只道德があらゆる特殊性の最終統一とも謂ふべきである。吾人の自我が自ら其內容となす所は普遍的生命の一部分であるといふは前者は後者を特殊の限定に於て受取る所に實現せられることを指す、普遍的生命といふもかかる特殊の限定として現はれる所の萬有に一貫して流れる

ものに外ならぬ、而して其中理性者として現はれるものにあつては各理性者の特殊性に拘らず理性者に普遍なる相を帶びて夫の普遍的生命が流れるので、超個人的の純粹悟性純粹意志の如きは卽ち此理性者の普遍相と見るべきである。普遍的生命を特殊的限定に於て受取る所に萬有各自の內容が成るといふのは萬有が成す世界に各自特殊の樣にて接すること卽ち自餘一切のものの一つ一つにそれぞれ特殊の關係を結ぶことが各自の內容であるといふと同じい。ライプニッツが各「モナド」の內容を自餘一切の「モナド」から成る世界を獨特なる樣にて表象するにあるとしたのを難んじて、かくては各々互に相寫す無數の鏡から世界が成るといふに等しく結局世界も各「モナド」も無內容とならざるを得ぬと批評するのは、世界とは各々獨立なる「モナド」が片端から集つて出來るとライプニッツが考へたやうに思ふからのことである。世界は「モナド」の集合ではなく唯一者たる神によつて「モナド」も「モナド」から成る世界も存する。萬有各自の特殊的內容は嚴として積極的に實にせられるのである、只此等の特殊相を其通りの特殊相と見る所が見る者自身の特殊的限定の然らしめる所である。萬有が特殊的なるは萬有が相關的に成ることで其の根柢として一貫の生命が流れてをるのである。若し此唯一生命が根柢となつてをらねば夫の「モ

ナド」說は無數の無內容の鏡から有內容の世界を構成せんとするものになり了る。吾人の自我が大なる自我の一部分であり吾人の外に客觀界ありとするはすべて有限者の存立は無限者の絕對的自己限定なるからである。故に吾人に頓着なく草木は春其花を開き秋其實を結ぶ、吾人に頓着なく他の理性者は各々獨自の生を營む、吾人の自由に之を左右するを得ざる必然として彼等は吾人に臨んで來る。然かもかゝる必然として吾人に現前すること自身が既に一面認識對象としては彼等は吾人獨特の認識樣式の範圍に入り來ることであり一面道德界の對象としては吾人と特殊の人格的關係に入らんことを要求し來ることである。吾人が草木の種々なる方面に於ける性質を認識するは草木に對する吾人の衝動の諸方面の意義を知ることであつて、此等認知の終極的統一に順つて草木に對應するは卽ち吾人自我の內容を實現することであり從て吾人の客觀界が取りも直さず吾人自身たる所以である。而して他の理性者との關係に於て吾人の萬有に對する關係は統一せらるべきである。蓋し吾人の外に客觀界ありとせしめる最も有力なるものは自由能力を具すと見られる他實在の吾人に現前し來ることである。吾人の自然的生活に對してのみならず道德的努力に對してすら大なる壓迫を加ふる如くに見えるものは人類同胞

である。然かも他人を其種々なる方面に於ける性質について知ること、卽ち吾人の彼に對する衝動の諸方面の意義を知ることにより、しかして此等認知を彼と我との唯一特殊なるべき關係の意義に終極的に統一することによりて彼と唯一特殊の人格的關係に入るは、我に對して彼を全うする所以であつて同時に彼に對して我を全うする所以である。かくの如くして彼我共有の客觀界が各自特有の世界卽ち各自自我の內容たるのである。道德が主客合一の實現であるとは此意味である。道德的實現に於ては各自の人格實現は客觀的精神の實現であり結局世界史實現に連貫するのである。道德的人格の內容は客觀的であつて宇宙的自我の內容に連なるものである。道德は純主觀が作る小宇宙ではなく客觀的宇宙への參同である。道德が結局宗敎と連貫すべき理由も此所にある。自然的生活として吾人は大宇宙に對して渺たる蒼海の一粟である、其運命は風前の燈火の如くである。偉人の道德的努力も時勢を如何ともする能はざるものがある。此間に在つて眞に自立することは如何にして出來るであらうか。吾人の客觀は本原的に限定せられる所があつても吾人の主觀は其主觀性たるに於て無限性を有つ。故に一切の客觀的限定を否定することによつて吾人は直に無限界に隣接することが出來るわけである、而して是れ

宗教である。運命の內容である一切限定を超出すれば運命に居て居らぬことになる、畢竟自立すべき自己の內容を出るのが所謂自立である。此所に無限の努力と無限の苦痛を覺える。此否定が直に道德ではないが此否定の上に行はれる肯定でなければ眞に根柢ある道德たり得ない。萬有が其主觀に於て直に無限性を有つことの半面は其客觀に於て各々特殊的に限定せられながら其限定が一切の限定と連貫することである、前者が宗教の起る所後者が道德の起る所である。故に道德は主客一體の深い自我の實現であつて純主觀の表現ではない。

此事は又道德が衝動の統一、欲望の制御として實にせられることに相當する。衝動は吾人の內的自然である、此與へられた內的自然を吾人が自由を以て生殺することは出來ぬ。意志の實現としては此內的客觀は遺漏なく統一せねばならぬ、內に動くほどの衝動は何等かの樣式に於て制御せねば人格的統一を保つことが出來ぬ。制し難いから或は當下に不用であるからとて遺し置かれた衝動があつては意志の鍛錬とはならぬ。又衝動乃至欲望は其對象の觀念其對象に關する諸の智識と連貫する故意志的統一は種々の智識客觀界に關する諸の思想の統一を意味する。起り來るほどの感想は悉く之を或る客觀的意義によつて統一せねば人格的統一を成さ

ぬ、有機的に結合し得ざる諸の思想の並立は信念の缺乏を意味する。道德が最具體的統一たるを期し些の抽象をも留めることを許さないはあらゆる客觀を主觀化せんとするからである、卽ちあらゆる限定を直接的統一の下に來さんとするからである。道德的生活は客觀界の統一なる故在るほどのものは之に取捨を施さずに在るに隨て之を統一すべきである。命に從はぬからとて妻子を逐へば夫として父として一家を道德的に立てたとは謂はれぬ、賢貞ならば之を愛重し愚ならば之を敎へる、順ならば之を愛し不肖ならば之を憐む。父母賢ならば悅ぶ、不正ならば悲むが諫めても犯さぬ。是れ家族的生活が其具體的なるに於て最もよく道德的組織の要素たり得る所以である。才學を撰擇して入學せしめ、不能者を卒業せしめず又は除くは、學校が既に抽象的立場の上に設けられてをるを示す。入學せしめたほどのものは能不能相應に育成して遺さざらんと努力すればそれだけ學校敎育が道德的となる。社會は有無交換智能競技によつて互に相利せんとする地なる故優勝劣敗を免れぬ。學校に入る能はず學校を卒へ能はざる子弟にも何等か敎養を施すべき道を立て、社會に於ける劣敗者にも相應の生存の地を與へ、自立し能はざる家族を扶助し、かくして民族の生命を一大意義の下に統一して一人の其所を得さるもの無きを期するを

國家とせば國家は此意味に於て道德的實體である。所謂善を嘉みし不能を矜れみ絕えたるを繼ぎ廢れたるを興すが生の最具體的統一である、仁義による政治である。是れ道德が客觀的精神の實現であり、民族の歷史を成す所以である。プラトーの考へた國家が內面的に完全であつて一箇の理想國を現はしても、之を此邦此時代に實現せんとして其現存する一切の國家的資料に大なる取捨を施し其歷史的連續を破る如きであつたなら藝術と道德とを混同し結局兩者諸共に破壞することになる。絕對的自由の立場からは忠孝も機略縱橫も等しく眞理である、自全の境としては閑雲頑石も蒸汽機關の運轉も學術に專念なるも等しく美であり得る。若し閑雲を友とするよりも學術に純一となるを一層尊重すべしとせば藝術の立場を去つて民族の歷史的生命に連貫する意義如何を考へる道德の地に立つからでなければならぬ。機略縱橫を措いて獨り忠孝を天下の大本となすは絕對的眞理の立場を去つてあらゆる生活をしてそれ其所を得しめんとする最具體的生活統一たる國家の維持に關する重要如何を考へる所の道德の地に立つからである。道德に游ぶといふ如きことが甚だ難くして道德は多くは克己であり鍛錬であり義務であるのは其が客觀的精神の實現に參同せんとする有限的理性の努力であるからである。道德的創造は

睿智界への復歸又は其の再現であつて、藝術に於ける如く絶對的自由の形式に居る主觀が第二の造化として隨處に獨立の小天地を創造すると相違する。

三

道德が主客合一の上に實現せられて純主觀の發現でないことは意志は衝動の統一によつて成るにても知られる。衝動は元來最も具體的なるもの、其自身主客未分一體的なるものである。衝動の客觀的方面は知として主觀的方面は情として發するが常である、一切智識は客觀界を表象し、之に反して感情は純主觀態を表する。一般の心理學も感情を心的生活の最も主觀的なるものと見てをる。衝動は一面感覺乃至知覺の進展を司どる統一的原理であつて、衝動が其對象を知覺すること明かとなれば欲望として現はれて明かに客觀界と交渉し來る、畢竟衝動自身に具はる客觀的方面の發展が卽ち客觀界の開展そのものである、卽ち又認識作用の發達である。故に感覺自身が衝動的性質のものである。衝動の客觀的方面の發展と共に主觀的內面的狀態たる感情が起る。あらゆる感情は愛情の樣態であると見るを得る、而して愛は卽ちまた欲である、只稍々客觀的に言へば欲稍々主觀的に言へば愛である。

愛が智を生むといふとき愛は純主觀であるよりは寧ろ主客具足の創造的力と見られてをる。主客の絶對的一體であるべき絶對者にあつては其純主觀は卽ち又純客觀でもある故若し絶對者の愛といふことを言ひ得るならば此絶對愛は卽ち一切を創造する原力である。此絶對愛は造化の慈意のことで既に在るものを愛するのではなく在らしめる愛である。有限者にあつては愛よりも衝動の方が渾一力であるが、無限者の原力を衝動と言はざるは衝動は何にか外に求める所あるものゝ如くであつて己の外無き絶對者に不適合と考へらるからである、而して純主觀である愛の方を造化の力と見るは絶對者にあつては純主觀が卽ち純客觀であつて然かも此主客一體が卽ち絶對主觀であるからである。其實愛は既に動靜の機或は隱見の際とも謂ふべきもので、動靜に居らず隱見に亙らざる絶對者は愛よりも更に深いと謂ふを得る。故に絶對愛は愛にも居らざる所の愛である、(故に老子は天地不仁と言つてをる)、此愛を故に慈と名つけて夫の愛着愛欲と區別する。絶對者の純主觀たる慈愛よりの創造は絶對的創造であつて、夫の有限的理性が分れた主客を合一せんとする道德的創造と區別すべき所がある、是れ宇宙の創造を神の藝術とも見る所以である。吾人にあつては道德は主客未分一體の衝動よりの發展であり藝術は純主觀といふ

べき情(其はいづれも皆愛情の樣態である)の表現であるが、絶對者にあつては純主觀たる慈愛は卽ち主客一なる絶對主觀なる故其の創造は藝術でもあり道德でもあり、美は善にして善は又美である。故に天地不仁に則る聖人不仁の立場卽ち人間慈愛の立場で萬物を觀るとき萬物皆悉く完結自全の趣を呈する、皆生意を有つのである、而して生意を宿ごす完全なる形相は卽ち美である。藝術を起す純主觀とは純なる情のことである。純なる情とはすべての情の根たる愛そのものが愛に居らざる愛(卽ち愛着愛欲より轉じて慈愛となれる愛)となるとき愛の諸樣態たる情も情に居らぬ情となるを謂ふ。情に居らぬ情が純なる情、純主觀である。藝術と純なる情との關係は情が藝術として卽ち完全なる形相として表現せられるによつて純となり、純なる情の表現なるが故其表現が完全なる形相卽ち藝術を呈する、藝術は純情が完全なる形相にまで表現せられたものである。而して情が形相に迄表現せられた所に主觀たる情が或る意味に於て再び主客一體の具體的立場を取つて客觀的方面たる知を發する趣がある。蓋し形相の表現とは客觀的開展であつて知に應する、而して此場合の知は卽ち直觀である。情が直觀にまで發展せるものが藝術である旨をクローツエが論じてをる。此直觀は衝動の客觀的發展たる認識と區別して純粹認識

と謂ふべきである。卽ちヘルバルトの所謂無意志的判斷（ウイレンローゼルウァタイル）に比すべきである。衝動より發展する認識は客觀界の開展そのものである。卽ち事實的知覺であつて經驗界の構成原理たる論理的概念幷に實在的連續を表する歷史的認知にまで發展するものである、卽ち結局悉く道德的統一の要素となる性質のものである。然るに衝動の主觀的內面的狀態ともいふべき情が其表現を求めるのは或る意味に於ける主客一體の立場に立つて其客觀的方面たる知卽ち直觀にまで開展することである。從て此知卽ち直觀は衝動より發する認識の如く客觀界の開展ではなく純主觀が畫く像である、純主觀が創造する想像界である、藝術である。此意味に於て藝術の作が人間の肖像であること人間自身が神の肖像なるが如くであるといふ言が當つてをる。情が客觀的性質を本來とする知卽ち此場合直觀にまで開展するは實に物心一如の眞相を吾人に彷彿せしめる。情の一氣を乘せて進展する直觀は其まゝ形相として現はれて其間髮を容れぬ。情が直觀に開展することが其まゝ筆動き指彈し吟咏發することである。此所に藝術の具體性があるので、所謂自然よりも一層實在的なる所以がある、形體と魂の全然の一致を示してをる。而してこのことが卽ち情の純なる所以である。意識の最も具體的なる實現は衝動の最具體的發展卽ち主觀客觀の

直接的合一であつて、信卽ち身口意の一致是である、是れすなはち意志であり眞の精神である。眞の精神は身心合一である、その如く眞の情も身心の一致である、只後者にあつては此の一致が現實的客觀界を餘所にした別世界の創造となる、前者にあつては此一致が現實界そのものである、同時に藝術が道德ほどに具體性を有たぬ意味がある。純なる情は慈愛の樣態たるだけよく創造的原理たり得るが、既に情たるに於て主客一體の具體的意識の主觀的方面のみを呈するだけ其創造が抽象性を免れぬのである。衝動が意志にまで發展するには衝動の發展たる諸の客觀的智識の統一が行はれねばならぬが、此統一は却てすべての衝動限定を否定した立場卽ち衝動の純化せられた所謂純粹衝動の立場からの統一でなければならぬ。此純粹衝動は衝動の限定が否定せられた所であるから其自身積極的內容を示すものではない、卽ち虛なる態、シルレルの謂ふ空虛なる力（レーレスフエルメーグン）である、將さに新たに限定の起らんとする所、卽ち慈愛である。故に慈愛は空から起る、己を虛くする所に起る。此の慈愛から發する客觀的內容は眞知卽ち事物の眞意義の認知である、此は所謂反省的判斷とも言ふべきもので意義價値の認知である。此の意義又は價値の認知は必然其の實現の要求として現前する、必然其意義に順つての實行として發展する。慈愛から發する

知は必然行爲に終る、愛知行は一貫である、而して其本は純粹性卽ち空虛にある。是れ衝動から意志の實現に到る行程である。藝術にあつては慈愛の樣態たる純情が根となつて其所から客觀的內容にも比すべき直觀が發するのであるから、此直觀は客觀的意義の認知ではなく全く純主觀の自己發現である、從て創造の意味は道德に於てよりも却て此方にあるが主客合一の具體性はそれだけ欠ける所がある。道德も藝術も純粹性を其共通地とする、共に自由界に屬する、只道德は主客一體の慈愛から發するが藝術は慈愛の樣態たる純情から發する、後者は具體的の慈愛といふよりも其內面的の樣態といふべく、其の主觀態を表する。故に實は道德も其純主觀的狀態に於ては純情である、其末だ客觀的認知と合一して實行に出でざる間は情である、忠孝も人道正義もそれぞれ一箇の情である。しかし只內に情が動くのみで未だ具體的でない、情は未だ十分に具體的でない。故に道德では只知るを以て足れりとせずして又情の動くことを要するが、又只情が動くのみでも足らぬ。情は知と合一せねばならぬが是れは各々抽象的である知と情と外面的に合するのではなく、具體的統一たる意志の實現が表面的分析的には情と知との結合と見えるのである。心理學的に情を觀察するは感覺知覺觀念等を觀察するよりも難からんが意志は猶更把

捉し難い。意志を內面的に觀察すれば或は情の强き動きとしてか或は嚴密なる思惟としてかの外には捉へられぬ、ヘルバルトが意志を心理學的觀察の對象としては否定したのは謂はれあることである。實に深いもの根本的なるものほど對象となり難い。意志がそうである如くに衝動もそうである、何にかの「感じ」としてゞなければ衝動といふものも認め難い、而して「感じ」とは何にかの形の「知」の動く態である。すべて「知る」の態を外にして心的事實は存しないのである。今情と意とを比すれば意志は一段見難い、只行爲として現はれて知の對象となれるとき見られる、是れ情よりも更に具體的なる所である。事物に觸れて道德的感慨を起したばかりでは未だ賴むに足らぬ。後者は須臾にして消散する傾がある。眞に痛切なる感激は具體的行爲として現はれる。故に道德的敎育に於ては只情を發せしめるを以て足れりとせず、必ず實行の機會を設けるやうにする、情を實地に現はすやうに仕組むのが訓育である。情が行爲として現はれて始て自己を知るほど具體的であれば取りも直さず意志である。情が直觀に於て己れを表現するは藝術といふべきである。但し情の强弱を意志的藝術的の別とするのではない。情が道德的實行としては現はれることもあり、藝術として現はれることもある、而して其現はれに於て性質が異つてをる

のである。忠孝の情が忠孝の實行ともなれば又忠孝の詩歌として現はれることもある、何れが强何れが弱といふのではない、實行と詩歌とは世界を異にするのである。强弱は純不純と同じではない、如何に强烈であつても情欲は純なるものではない、悶へ苦しむ戀愛は强いのかも知らぬが純であるとは謂はれぬ。此所に藝術は純なる情の發露たる所以がある。藝術として現はれるによつて情が純となるとも、情が純である故藝術として現はれるとも言ふを得る。此所に藝術特有の自由が開ける、純とは自由である。悶へ苦しむ戀愛が直觀に展開して完全なる形相界を作るによつて其苦悶を超えるのである。藝術の題目に戀愛の多いのはすべて情の根は愛であつて愛の切なるものは多くは戀愛であるからであらう。しかし其苦悶を超えるといふは其情が弱はるとか冷却するとかいふのではない、實に純となるのである。眞の愛は愛着ではなく愛に居らざる愛卽ち慈愛である如く、愛の樣態とも謂ふべき情は情に居らぬ情となるによつて純情となるのである。完全なる形相界として現はれるによつて情が自全の趣を得る、卽ち情に居らぬ情となる。情の自全とは情に純らなること、只其情の世界のみあつて他のものを雜じへぬことである、卽ち其情に游ぶのである。只其情のみで他を知らぬときは情は所謂自性解脫する。只其情のみ

ならば自らを忘れる。完全なる形相として現んずるによりて情が自全の世界に居る、卽ち自らを解脫する。「關雎は樂んで淫せず哀んで傷らず」といふ境地を呈する。後者はよい加減に樂しむよい加減に哀しむといふ如きことでない、實に樂に純であり哀に純であるをいふ、而してそこに却て精神の自由が保たれるのである。詩歌に發するによりて戀愛が自らの世界に游ぶ、只自らにのみ純となる、而して此裡既に自己の超出が行はれてをる。樂に居るものは樂に純なる、能はず、歡樂極つて哀情生ずるのである。戀愛に居るものは戀愛に純なる能はず嫉妬怨恨憎惡に轉ずるのである。怨恨も其情を樂器に寄せ咏歌に發すれば怨恨であつて怨恨でなくなる。情の純は卽ち情の眞である。現實の情は必ずしも眞でない、現實怒れる人は必ずしも怒に純でない、怒の對象に向つて馳せるから怒り狂ふのである、或は怒を遷するである。人只其自己を失つて情に驅られるを蔑視して、其怒の眞に畏るべきを見ない。夫の藝に游ぶものは現實的對象に向つて其制し難き怒を馳せずして怒の舞臺に全自我を露出するから怒に純である、從て見るもの却て眞實の憤怒に接する思をなし心を聳動せしめるのである。すべて美は完全なる形相の上に見られる、完全とは自全である。情が直觀に發展して自己の世界を畫くのが自全の形相卽ち藝術である、而し

て自全の世界を成すによつて情が純となるのである。情が自らの世界を作つて此裡に游動するから外に對象を求める依存的狀態を脱出するのである、自由界を開くのである。若し情が對象を外に追求すれば欲望である、或は情欲である。情欲は正さに不純である、不美である。情はそれぞれ特殊であり、其の表現たる自全的形相もそれ〴〵特殊であるが、其自全といふ形式に於て普遍的である。自全と自由と純は同じい。如何なる情も故に自全の形相卽ち藝術として表はれるよつて等しく自由を得る。觀る者も此自全の形相に自らを措くことによつて自ら自由を覺える、藝術は藝術家自身と幷に觀者とを自由にする。自由は自全といふ形式の上にある故藝術の特殊的內容によつて自由を觀者が覺えるのではない。忿怒の相であつても柔和の姿であつても、和樂の情を歌つたものでも思慕怨恨の聲であつても、此等內容の特殊性に拘らず等しく吾人を自由にする卽ち吾人自身の自由界を開かしめるのが藝術の藝術たる所である。若し其特殊の內容が特殊的印像を觀者聽者に遺こすならばそれだけ其作が藝術の眞に遠ざかる、是れ其特殊の情に居らしめるもので情を超脫せしめない卽ち自由ならしめぬのである。內容に居りながら內容を忘れしめて只自由の天地に游ぼしめるを眞の藝術とする、而して此所が藝術が道德と共通の

世界に住する所である。

四

藝術は其性質上固より教訓的のものではないが、實地教訓となるならぬは他の事情によつて定まるので、教訓となつたから藝術でないとか藝術は道德上何等影響するものでないとかいふは藝術哲學からは餘計の議論である。自由界に二も無く三も無い以上藝術によつて開かれた自由界が自由界に屬する道德と交通し來ることあるは當然である。交通するとせざるとは具體的の人の上にあることで、するから藝術たるを失ひ、せないから藝術であるといふわけではない。實に道德的生活も全體として之に安んずれば又美である。道德の由つて出でる慈愛の立場からは物皆完全である卽ち美である。慈愛は愛着を脫した愛であつて、愛の諸樣態たる諸の情をして情に着せぬ情卽ち純情たらしめるものである。純情の表現が藝術であるのは慈愛が萬物を生かすの意である、故に藝術家は第二の造物主とも謂はれるのである、故に藝術の作に接して吾人が自ら自由を覺えるは吾人の情が淨化せられる意味である、愛着を脫して慈愛に近づかしめることである、吾人をして自己の天地を開拓

する創造的原理に還らしめることである。故に藝術の世界に游んで圖らず自己の自由を會得した者が退いて現實的生活の上に此自由を具體化するは最も有り得べきことで、之を藝術が道德に影響したといふに不可はない、等しく精神界に屬することは互に相影響するは寧ろ當然である。自由とは名である、名は理を表する、而して理は一であるが事は多である。理に於て自由は唯一無二であるが事實としては自由に入ることの深淺に無量の度がある。吾人は某の手段によつて日常現實的生活から暫く吾人自身を抽象して前者が齎らす諸の攪亂から遠ざかることは出來る。而して斯かる謂はゞ人爲的である狀態の下に更に又某の手段によつて諸の欲、諸の情の動かざる狀態に吾人を措くやうに力めて、遂にすべて此等を否定した境について何等かの消息を得しめることは出來る。しかし斯かる手段によつてどれだけかの程度に於て覺えた自由を飜つて刺戟の蝟集し來る日常現實の上に實にするは出來ることもあり出來ぬこともあつて、所謂靜中の工夫は必ずしも動中にも有效たるを得ぬのであるが、又有效なることもある。藝術が吾人を自由にするは右の如き方法によつてとは異にして且つ現實的生活から見れば尙ほ一層抽象的であるが、其にも拘らず此所に覺えた自由が全然現實的生活上實現せられぬとはいはれぬ。しか

しいづれにしても藝術によつて達する自由は現實界を外にした境涯に入るによつて達するのであるから其境涯の去ると共に其力を失ふのが多い、暫く天上に於て自適を得ても地に下れば之を忘れる如きである。等しく現實的生活の裡にあつても平穩なる境遇に於て自由を得たものが誘惑多き事情に遇へば其心動搖して自由を得ぬも同理である。ショーペンハウエルの言へる如く藝術は瞬間的解脱を得さすもので宗教の如く永久に解脱せしめぬ。藝術の境は恰も夢中の境又は醉中の趣の如くである。吾人は往々夢裡に眞實の生活を味へる是れ現實に於ては物に觸れて欲動きて生活が不純である卽ちそれだけ非實在的であるが、客觀界との交渉の暫く絶たれた夜の中に魂の純なるを得る、このとき現前するものは其純情の發露たる自全界である、此方が現實的生活よりも眞實である。固より夢裡にかゝる美の世界に游ぶは平生と無關係に然るのではない、現實に於て曾て欲情否定の努力をしたことがなければ只偶然に美なる夢を見るわけがない、只日常生活に於ては右の否定が現實を超出せしめるほどに十分でなかつたのが刺戟の一時杜絶せられた夢に於ては限定超脱の效を奏したのである。醉中の趣といふも同前である。衝動に根ざす諸の懸念雜慮が醉によつて一掃せられたる所から心の眞が自己を露出する、萬物の相

人生の趣が各々其眞を呈する、卽ち美の世界に游ぶのである。是も平生と關係あるは夢の場合に於けると同じい。醉中夢裡の境が現實との具體的連續を外にして自由界を呈するは藝術によつての自由が具體性に於て缺く所あると其性質を同じくする、卽ち吾人を或る程度に抽象的である生活に措くことによつて自由を得さすのである。眞の自由は吾人に與へられた現實的限定を遺こす所無く一一否定し去つて行かねば達せられぬ、是れ卽ち意志の鍛錬であつて、善は斯くの如く日常現實的生活に卽いて否定の上に肯定を行ふによつてのみ實現せられる。而して斯かる實現は只一貫せる客觀的意義によつて終始統一せられゆく具體的連續に外ならぬ、卽ち歷史的生活である。道德的生活は孤立的に成るものならず一貫的意義によつて統一せられる全體である。藝術に於ける自全は歷史的全體ではなく、現實的連續を餘所にして情の發する隨處に形相を現んずるものである。固より此所は道德と藝術との性質上の相違を言ふのであつて、具體的一個人が同じ感情から一面實踐的行爲に出で一面藝術的行爲に出づることはあり得る。國を思ふ情から或時は憂國的行動に出で或時は憂國的詩歌に發するが、後者は前者とは世界を異にするのである。又同一の行爲を歷史的にも藝術的にも見ることの出來る場合もある。(たとへば神

皇正統記の著作は其歴史的行爲たるに於て湊川の義戰と同等であるが、又之を至情の發露たる詩と見ることも出來る。かゝる場合行爲の當人にあつては自由の深さは違つた所はない。只道德としての性質と藝術としての性質に相違がある。自由は元來超時間的のものであるから其が藝術に於てでも乃至道德宗敎に於てでも一度實にせられた以上失はれぬ筈のものであつて、かの瞬間的解脫といふ如きは理としては嚴密ではない。しかし自由そのものは超時間的であつても有限者が之に與かるには得ることがあり失ふことがある。宗敎は現實的生活に於ける限定を最も深刻に否定することによつて達せられるが常であつて永久的解脫とも謂ふを得るであらうが、それにも拘らず尙ほ其所に實にせられた自由を確實にするには道德的修行が必要である。信仰後の道德的實踐が堅固でなければ其信仰は其人を救ふに足らぬとも說いてある。所謂鏡に向つて其面を見て去り後其如何なる相貌なりしかを忘れる憂がある。故に最も具體的なる統一は只善である。卽ち歴史的統一である。

衝動から發展する兩面とも謂ふべき主觀的感情と客觀的智識との具體的合一を道德とせば、純主感の純粹發露は純藝術である。此意味に於て音樂は特に藝術の本質を具する。音樂に比すれば建築繪畫詩歌は一層客觀的智識の要素を含んである、

一層概念的である。獨り音樂は情の直接的發露である、ショーペンハウエルが藝術の中に就て特に音樂を以て形而上界の消息を傳へるものとした謂れがある。音樂ほど直接に心を動かすものは無い、從て其性質上最も民族的である。客觀的智識の入り來る所には模倣抽象の餘地が出來るが純主感の直接的流露は此意味に於て却て具體性をよく表する、具體的生活そのものでなくとも具體性を表するのである。情が直接聲に發するのが恐らく言語の起りであらうと思はれるが、そうであれば言語は既にウブな藝術である。言語の構造は客觀的の形を表し、其の主觀的創造力が情である。既に客觀的構造として大に發達しながら其主觀的生命たる情との本來の一體を保つものが詩歌である、故に詩歌は音樂である。スウエーデンボルグは詞は智を音聲は愛を表すと言つてをるが(「神愛と神智」の中に)、歌は卽ち愛智の合一である、從て繪畫建築等が其愛其情を直接に發し能はざるに比して音聲として直接に情を發する咏歌は具體性を多く帶びると言ふを得る。故に道德的感情の如きは殆どすべて吟咏に發するといつてよい。ヘーゲルの「フエノメノロギイ」は固より大なる意味に於て詩であるであらうが(ケーベル博士はよくかく言はれた)、樂的に直に吟咏に發するのが詩の本意である。音聲と言葉愛と智の直接的合一として詩は最

もよく人生の眞を表現する、是れ詩が經たり得る所以である。詩三百一言で蔽へば思無邪である、純情である、而して聖人選んで以て經となす所以である。禮と相並んで樂が治國の道であつた。プラトーの理想國からは詩人が斥けられてをるやうであるが、此國の普通教育は實に音樂詩歌による教育である。音樂詩歌は特に然りであるが概して藝術は其が純主觀の發露たるに於て模倣抽象を容れず最も個性的である、民族的個性を著るしく帶びる。又藝術は未だ現實界に實現せられ得ざる純主觀の發現として理想を完全なる形相にて示すに最も適してをる。此點に於いて藝術ほど民族的理想を掲げるに適したものはなく、是によつて民族は自己の精神の肖像を見るのである。藝術は最普遍的創造原理としての慈愛の諸樣態たる諸の純粹感情の表現として到る所に自全の天地を作り、所謂絕對的精神の發現であるが、其純主觀的たるに於て其最も個性的なるに於て又最も民族的である。從て又生活の最具體的統一たる卽ちあらゆる個性の終極的統一たる道德が必然的に國民道德として實現せられる其國民道德の理想が藝術として畫かれるは自然のことである。實に最も普遍的なるものゝ現れは最も個性的なるものである。其形式卽ち其本質に於て絕對的精神の發現である藝術が其內容に於て歷史的であるのは又絕對的精神

と客觀的精神との結局の合一を語る。道德の具體性は規範と現實との合一の上に成るのであるが、このとき規範は自由主觀に發して個々の場合に際して其實現を要求する具體的普遍である。かゝる具體的普遍を其輪廓の明かなるべき形象(ビルド)として現はすことは出來難い。故にヘルバルトが道德的理念を美的判斷又は純粹認識としたばかりでなく之を又摸型(Musterbild)と見て、意志的要求的のものでなく恰かも摸寫すべき手本の如く見たのは當つてをらぬ。しかし規範(卽ち理念)と現實と合一して成れる具體的道德生活は形象を具する自全體なるべきが故、かゝる具體的なる一箇の形相として道德の理想が藝術的に表現せられたものは意志の方からは自己を象徵するものと見られ、之に倣ふべき己れが本來の姿とせられる。此意味に於て藝術は道德に其理想を示すものである、特に國民的道德精神は國民の藝術の上に其理想を現はす。固より是は現實の外に世界を有つ藝術に、道德的影響を及ぼすことを、其性質とせよといふのではない。影響は精神界の一般的生命の流通上自ら起ることである。純粹意識界は唯一なるべきが故に有限的理性の生活が具體的となるに從つて宗敎道德藝術は勿論政治經濟に至るまですべてが悉く調和すべきである。宗敎が民族生へ拔きの傳來的宗敎であり又は今は既に民族的歷史と全然融合せる

宗教であれば、民族の道德は深く宗教的であつて、最も心術を重んずると同時に其が行爲の上に現れる特色は政治的經濟的生活にまでも透徹する。かくの如くであれば祭政教の一致は未開發の民族的生活を語るものでなく、却て其生活の眞實なることと具體的なることを示す。道德が宗教的であり深く主觀的であるに從て只、法(レヒト)或は義務とのみ云はずして、却て其情は一面藝術特に詩歌に現はれる、宗教藝術道德が合體する。而してかゝる合體は必然的に政治を司配する、禮樂が治國の根柢となる。如ゝ此が眞の國家組織である。

道德が深く主觀的となるとは卽ち眞に客觀的歷史的となるを意味する。單なる主觀の所產でなく歷史を貫く意義に順つて現實を統一するものは必然政治と連なる。國家學(ポリチックス)は倫理學と一帶でなければならぬは道德を根柢とすべき政治は必然民族の歷史と連貫するからである。政治が客觀的現實のみの統一に偏するは畢竟欲望に訴へての統一なるが故であつて、たとへよく現實を統一し得ても機械的抽象的生活を呈するのみで、理想意義の生命がない。純主觀の表現たる藝術は之れに比すれば遙に實在性と具體性とを多く有するも、現實との連續を缺くだけ具體性を缺く。道德は謂はゞ政治と藝術との綜合であつて理想によつて現實を統一するものであ

る。而して具體的組織としては道德は國家組織の上に實にせられるので、所謂理想とは國民的歷史を一貫する意義に外ならぬ。眞正の政治はかゝる歷史的精神による統一でなければならぬ。經濟的公正を期して利用厚生を全うせんとする理想の如きも其が眞に人生に滿足に與へるに足るには民族的文化を其實體として豫想するでなければ空想たるを免れぬ、蓋し民族的ならぬ只の文化又は世界的文化といふ如きは空名であつて、若し其實ありとせば其は只物質的利便の生活に外ならぬ。吾人が樂しみつゝある生は、民族的歷史の文化に外ならぬを覺えぬは其が吾人の曾て離れることなき平常であるからである。しかも此文化の歷史的精神の實現には盛衰あるが故に敎といふものが立つて政治を導かねばならぬ。未だ政治の上に實現せられざる敎は只理想であつて藝術性を帶びてをる。所謂堯舜を祖述し文武を憲章して立てた孔子の儒敎は民族の歷史的精神の發現であるだけ具體的であつてそれ自身道德的行爲とも見られるべきであるが、之を政治に施さぬ間は抽象性を脫し得ない。時間の裡に一步一步現實を統一しゆくが眞の具體性である。プラトーの理想國もギリシャ民族の文化を大に其構成的要素として採れるに限り歷史的であらうが、孔子が先王を祖述したほどに歷史的連續性を有たぬ限り一層藝術的である。

如何なる政治的「ユートピア」も一面其案出者の屬する民族的文化の特質を帶びかくて其だけ歴史的たらざるはなく、一面現實的連續を餘所にして構へた理想でありかくて其だけ藝術的たらざるはない。吾と同じ歴史的連續に居らぬものゝ案じた理想國は吾には全く一箇の藝術の作であつて、吾は其完結せる構造の美を觀又其構造を活かしつゝある主觀に動かされることはあつても、其構造に倣つて吾が現實的團體生活を組織せんと企てるは國家及び道德の性質を知らぬものである。此種の理想國は、恰も藝術の作が其內容の特殊性によつてゞなく其形式の普遍性によつて吾人自身の自由界を開放するやうに吾人を動かす如くに、其普遍的精神によつて吾人をして又吾人獨自の理想國を創造せしめるやうに吾人を感化せねばならぬ。彼自身にとつてすら藝術の作たるを免れぬ理想國なれば、之を吾の理想とするだに誤なるに、之を吾の實地に適用せんとする如きは破壞的たらざるもの稀である。一國にあつても屢々革命を起して其文物制度の歴史的連續を傷ける如き民族は感情的藝術的と稱すべきであるが、之に反して意志的である民族は過去に拘泥せずよく世と推移すると共に歴史的連續を多く保つやうに思はれる。且つ藝術に於ても道德に於ても相互の影響は其者が眞なる限り只形式の上に行はれるべきである。其內容

の特殊によつてゞなく其形式の普遍によつて動かすが其藝術の作の純眞なるを語るとシルレルが言へるは道德的感化についても嵌まる。「二つの天眞(ディヴィニティー)は互に相呼應す」とアドラーが言へる其天眞は個性を指してをるが、此個性は個人的個性に限られず又國民的個性にも及ぶと見るべきである。彼の獨特性に勵まされて我の獨特性を發揮し、彼の文化を敬愛して我が文化の本領を失墜せざるが卽ち彼我相提携して世界史に貢献する方法である。而して藝術自身も文化の一內容として結局此歷史に屬するものであり、藝術家自身も其藝術家たるに於て道德的統一內にあることを示す。是れ當初に述べた絕對的理性には善美一であるといふ意とは別意義に於て世界史的精神には善美一に合するの意である。